慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	18世紀末ドイツ文学・ 文化の様相 : フリードリヒ2世のドイツ文学論を中心に据えた記述の試み
Sub Title	Deutsche Literatur und Kultur am Ende des 18. Jahrhunderts im Spiegel von Friedrichs II. Essay ,,Ueber die deutsche Literatur" und seiner Rezeption
Author	渡部, 重美(Watanabe, Shigemi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.225(188)- 241(172)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0241

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

18世紀末ドイツ文学・文化の様相
——フリードリヒ2世のドイツ文学論を中心に据えた記述の試み——

渡部　重美

I　はじめに

フリードリヒ2世のドイツ文学論『ドイツ文学について。非難されるべき欠点，その原因とそれを改善するための手段』(1780)[1]に対しては，ヴィーラントも書評の中で「この著作についてはここ数ヶ月間大いに話題になっている」[2]と述べているように，同時代の作家や知識人からさまざまな反響があった。この反響の大きさは，この文学論が，当時すでにドイツ諸邦の中で確固とした地歩を築きつつあったプロイセンの，しかも「啓蒙専制君主」として名高いフリードリヒ2世によって提出された，ということと無関係ではないだろう。そして，その内容に関する評価はひとまず保留するにしても，この文学論を中心に置いてその周辺で起こった議論に目を向けてみると，当時のドイツ文学ばかりでなく，ドイツの精神文化全体が置かれていた状況が垣間見えてくるのである。本稿では，まずフリードリヒ2世のドイツ文学論の内容を概観し，次に，主にこの文学論がきっかけで起こったドイツ文学・文化に関する議論の中から，「ゴットシェート派 vs. シュトゥルム・ウント・ドラング派」，「当時の翻訳事情」，「プロイセンにおける言論の自由」の三つのテーマに絞って整理し，18世紀末ドイツ文学・文化の一局面を描き出してみたい。

II　フリードリヒ2世のドイツ文学論

フリードリヒ2世の文学論は，特に章割りをして書かれているわけでは

ないが，その論点を整理すると主に五つの柱があると言える。

①ドイツの文芸，特にドイツ文学の現状把握
②そうした状況に至っている主な原因について
③その現状を打破するための方策について
④ドイツ文学の将来の展望
⑤学校・大学教育に関する問題点の指摘と教授法上の提案

五つ目の論点については，比較的多くの紙数が割かれ，間接的にはドイツ文学に関する議論とも結びついてくるし，また，現代の学校・大学教育について考える際に参考になるような提言[3]も述べられていて興味深いが，本稿では深く立ち入らないことにする。

(1)ドイツの文芸，特にドイツ文学の現状把握

ドイツの文芸に関して，フリードリヒ2世は，「ドイツには古代ギリシャ・ローマ人に比肩しうる哲学者がいるだけでなく，ジャンルによっては彼らを凌ぐ哲学者もいる。【中略】しかし，こと文芸に関しては，貧弱な状況にあると言わざるを得ない。」(ÜDL, S. 46.) と述べ，ギリシャ・ローマの古典に及ばないばかりか，同時代のフランス，イタリア，イギリスとくらべてもはるかに遅れている，とかなり否定的な評価を下している。

彼によれば，ドイツ文学で評価できるのはゲラートの寓話[4]，クライスト (Ewald Christian von Kleist : 1715-1759) の詩，そしてせいぜいゲスナーの牧歌くらいである (ÜDL, S. 46-47.)。さらに，その批判の矛先はもっぱら当時の演劇，特に悲劇に向けられる。喜劇の分野では，アイレンホフ (Cornelius Hermann von Ayrenhoff : 1733-1819) の『郵便馬車』(1769) のようにモリエールに勝るとも劣らない出来映えの作品もあるが，悲劇に関しては，すべての作品が芸術の規則を無視していて破棄すべきものばかりである (ÜDL, S. 47.) と酷評する。そして，フリードリヒ2世は，当時のシェークスピア劇の流行を，こうしたドイツ演劇，ドイツ文

学，ひいてはドイツの文芸全体の貧弱さを象徴する出来事として理解する。

「これまでドイツには趣味といったものがほとんど根づいていないことを納得するためには，公開されている芝居を見るだけでよい。そこでは，ドイツ語に翻訳された，おぞましいシェークスピアの作品が上演されている。集まった観客はみな，この滑稽な茶番劇を見て大いに楽しんでいるのだが，こんな芝居はカナダの野蛮人たちの前で演じるのが相応しいのだ。シェークスピアの作品をこれほど酷評する理由は，演劇のすべての規則に違反しているからである。規則は守らなければいけない。この規則については，アリストテレスが詩学の中で，『時間，場所，筋の三つが一致していること』が悲劇を興味深くするための唯一，正しい方法だと書いているではないか。」(ÜDL, S. 65.)

フリードリヒ2世は，ゴットシェートに代表される啓蒙主義演劇論の考え方に忠実に沿って，筋が何年にもわたって続き，高貴な人物が出てくるかと思えば今度は卑しい身分の人物が出てきたり，悲劇的な内容が展開しているかと思えば滑稽な茶番劇に変わったりして，「本当らしさ」(Wahrscheinlichkeit) を欠いているシェークスピア劇を批判する。しかし，作品が書かれた当時のイギリスの歴史的状況を考えればシェークスピア劇はまだ許せるが，彼にとって我慢がならないのは，『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(1773) のような，シェークスピア劇のひどい模倣作品がドイツで書かれ，喝采を浴び，繰り返し上演されている事態である (ÜDL, S. 66.)。

(2)そうした状況に至っている主な原因について

フリードリヒ2世は，ドイツ文学がこのような状況に陥ってしまった原因を，「国民の能力や才能のせいにしてはいけない。原因は，祖国を破壊し，人の命や財力を失うことになった，絶え間なく続いた悲惨な戦争のせ

いなのである。」(ÜDL, S. 49.) と説明する。「必要不可欠なことから始まって，そのあとに快適なことがつけ加わる」，すなわち，国土が確定し，そこに人が住むようになって，国の状態が安定し，国力が充実したあとで初めて文芸や芸術の花が開き，趣味も洗練されてくるのであって，ドイツはまだやっと戦争が終わり国内が安定し始めた段階なのだ (ÜDL, S. 44.)，というのが彼の現状分析である。さらに，ドイツが政治的にまだ一つの統一国家を作れないでいる状況は，ドイツ語の未発達，混乱，不統一といった精神・文化的状況の中にも顕著に反映されており，これが，ドイツ文学の遅れの大きな原因となっている，と論を進める。

「私が目にするのは，地域の数だけ多種多様に異なった方言を持つ，未発達の言語である。どの地域でも，自分たちの言葉が本当の，生粋のドイツ語であると確信している。我々には，言語の純度を測定する基準となるような言葉や言い回しを集めた，国民全体に認められたサンプル集がまだない。シュヴァーベンで書かれたものは，ハンブルクではほとんど理解されず，オーストリアの文体は，ザクセンの人々にとっては不明瞭で分からない。したがって，いかに才能のある作家でも，いまだ未発達のこの言葉を使いこなすことは不可能なのだ。」(ÜDL, S. 45.)

とすれば，この現状を打破するための方策はただ一つ，「ドイツ語の改善から始める」(ÜDL, S. 51.) ことである。

(3)その現状を打破するための方策について

ドイツ語を改善し，洗練するための方法としてフリードリヒ2世が挙げているのは，主に次の三つである。

①ラテン語ではなく，ドイツ語で書くこと (ÜDL, S. 81.)

②何よりもまず「明瞭さ」(Deutlichkeit) に気を配ること (ÜDL, S. 51, 60.)

具体的には，

・挿入句をはさんだ長い複雑な文ではなく，短くて簡潔な文を書くよう心がけること（ÜDL, S. 51, 60.）

・ドイツ語の持つ音を耳に心地よく聞き取りやすいものにすること。例えば，動詞の語尾-enはほとんど聞き取れず不快なので，sagen → sagena, geben → gebena 等としたらどうかという提案（ÜDL, S. 61.）

③ギリシャ・ローマ，フランス，イタリア，イギリスの優れた作家の書いたものをドイツ語に翻訳すること（ÜDL, S. 76-77, 82.）

フリードリヒ2世は，これら三つの方法の相乗効果によって，ドイツ語がより完全なものになって行くのだと考える。①と③により，古典語あるいは外国語のできる一部の人々だけではなく，より多くの人々が幅広い知識を身につけることができるようになり，彼らの趣味が洗練され文章を読む目が肥えて，それがまた作家を刺激して，執筆の際に表現の選択や文体に気を配るようになる。また，ギリシャ・ローマ，フランス，イタリア，イギリスの優れた作家はいずれも簡潔な文体で執筆しているため，③の作業は②の努力とともに，簡潔明瞭なドイツ語の育成につながって行くのである。

しかし，ドイツ語の発達とドイツ文学の発展に関するこのフリードリヒ2世の議論は，一種の循環論に陥っているように見える。「いまだ未発達で洗練されていない言葉を使っていい作品を書ける作家などいない，と私は確信している」（ÜDL, S. 44.），あるいは，「いかに才能のある作家でも，いまだ未発達のこの言葉を使いこなすことは不可能なのだ」として，まずドイツ語の発達が先行しなければいくらいい作家がいても文学は発展しないと論じる一方で，古代ギリシャ，イタリアやフランスの例を引きながら，偉大な詩人・作家が現れて表現を豊かにし文体を洗練することで，それが一般の人々の間にも広まり言葉が発達する（ÜDL, S. 45-46, 57-58.），つまり，言葉が成熟するためには模範となる作家ないし文学が先行しなければならないとも述べている。さらにまた，上の①のような提言を

しておきながら，宮廷でドイツ語がほとんど話されないのはドイツ語が未発達な言葉だからである（ÜDL, S. 82.）とし，フリードリヒ2世自身もこの文学論をフランス語で書いている矛盾である。この二つの点については，次節でさらに触れたい。

(4)ドイツ文学の将来の展望

ドイツ文学の現状については悲観的なフリードリヒ2世だが，その将来に関してはかなり明るい，楽天的な展望を持っている。

「我々の文学が，近隣諸国の文学ほど速やかに発展できない原因となった障害について説明をしてきた。それでも，あとに続く者が先人より優れている，ということがときにはある。これは，我々ドイツ人には思いの外あてはまることかも知れない。ただし，君主たちが学問好きになり，学問に携わる人々を励まし，彼らを賞賛し，褒美を与えることでさらに先へと推進して行く場合だけである。ドイツにメジチ家があれば天才が芽吹くし，アウグストゥスがいればヴェルギリウスが何人も生まれるだろう。そうすれば，我々にも模範となるドイツ人作家が生まれ，みながその作品を読みたがり，近隣諸国の人々もドイツ語を学び，宮廷でも喜んでドイツ語を話すようになるだろう。ひょっとしたら，優れた作家のおかげで，洗練され，完成の域に達したドイツ語がヨーロッパ中で話される日がいつか来るかも知れない。ドイツ文学のこの素晴らしき日はまだやって来てはいないが，近づいており，きっとやって来るはずだ。」（ÜDL, S. 83-84.）

この箇所を読むと，(3)の最後に述べた循環論と矛盾は解消する。すなわち，上述した①～③の方法によって誰よりもまずドイツ語の発達に貢献すべき人物としてフリードリヒ2世が考えているのは，かなりのレベルの語学力や知識を持った「学識者」（Gelehrte）なのである。ところが，こうした学識者たちはラテン語で著述をし，しかもペダンチックに些末なこと

にばかりこだわっている。「彼らの著作は，つまり，彼ら以外のドイツ人のために書かれたものではない。ここから，二つの由々しき事態が生じたのだ。つまり，ドイツ語がまったく洗練されず，旧態依然として錆びついたままになり，ラテン語を理解できない大部分の国民が知識を得る術を知らず，無知の状態に留まってしまったのである。」(ÜDL, S. 81.)

このような学識者たちの実態，彼らと他の国民との間の埋めがたい溝については，ニコライも『ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』(1773-1776) の中で同じような観察をしている[5]。ニコライは，ドイツにはまだ「読者が読む必要がありかつ読むことができるものを書く」本当の意味での「文筆家」(Homme de Lettres) がいないことを嘆いているが，フリードリヒ2世も，(3)で挙げたような方法でまず学識者たちがドイツ語の改善に努め，ドイツ語で書きながら，その過程で本当の意味での作家が生まれる（学識者たちの中から生まれてもいいし，他の人々の中から生まれてもいい）ことを期待している（ÜDL, S. 59-60.）のである。ドイツ語の発達と優れた作家の登場は，どちらが先ということではなく，学識者の努力を媒介にしていわば弁証法的に絡み合いながらより完全なものへと高まって行くべきであり，君主および宮廷はそのためのバックアップをすべきである，と考えているのである。

III　フリードリヒ2世のドイツ文学論をめぐって

(1)ゴットシェート派 vs. シュトゥルム・ウント・ドラング派

フリードリヒ2世の文学論がきっかけで起こった論争で，まず浮き彫りになってくるのが，当時の演劇をめぐる，いわゆるゴットシェート派とシュトゥルム・ウント・ドラング派の対立関係である。文学論の中で『郵便馬車』を高く評価されたアイレンホフも，フリードリヒ2世同様ゴットシェート派に属していた。フリードリヒ2世に同調して，アイレンホフは次のようにシュトゥルム・ウント・ドラング派の詩人たちを攻撃している。

「我々の粗野な趣味が演劇ほどはっきりと見て取れる場はないだろう。

【中略】詩人たちがこの路線で進んでいたら，間違いなく彼らは傑作を生みだし，ドイツ演劇の極貧状態を救うことができたであろうに。だが，どうだ。そこへ奇人変人たちが現れて，この路線で行くのは極めて難しいが，でも真っ先に目的地に到着したいと思った。そこで彼らは別の道を選んだ。趣味のいい人なら——いや誰も——決して選ばないような道を。すると突然，劇芸術の規則はすべて（この規則も，他の芸術の規則と同じように自然そのものの奥深くからくみ取られたものなのだが）踏みにじられ，悲劇の品位も形式も軽んじられ，アリストテレスやホラティウスはペダンチックだと言われ，メルポメネの威厳ある殿堂は，ごちゃごちゃと色を上塗りした道化の小屋掛けになってしまった。【中略】出版者や舞台監督は天才たち——彼らはお互いにこう呼び合っているのだが——の新しい作品にほくほく顔で，理性よりも目のための楽しみを追い求める群衆たちも，同じようにこれを楽しんだのだ。」(6)

シュレーゲル（Johann Elias Schlegel: 1719-1749），クローネク（Johann Friedrich Cronegk: 1731-1757），ヴァイセ（Christian Felix Weiße: 1726-1804）たちがせっかく古典ギリシャやコルネーユ，ラシーヌ，ヴォルテールの路線に沿ってドイツ演劇の旗揚げをしたばかりなのに，シュトゥルム・ウント・ドラング派の「奇人変人」たちが現れてこれを台無しにしてしまった。彼らの「シェークスピア風」の作品は，頭よりも目を楽しませるもので，残念ながらこれが大衆受けしている。そのおかげで真っ当な作家は沈黙を強いられ，本物の悲劇は日の目を見ることができなくなってしまった(7)，とアイレンホフの批判は辛辣である。

これに対して，例えばシュトゥルム・ウント・ドラング派寄りのメーザー（Justus Möser: 1720-1794）は，イタリア人とフランス人が求めるものは「均一性」（Einförmigkeit）であり，イギリス人とドイツ人が求めるのは「多様性」（Mannigfaltigkeit）で，それぞれその土地や風土に根ざした特徴であり，それぞれに長所を持っているとしながらも，「乱雑になる可能性があるとはいえ，後者の方がいいと思う。というのは，たかだ

か五つのものが集まってできた統一体よりも，統一へ向かおうとする何千という多様性の方がより大きな効果がある，というのは確かな真実だからである。」と反論し，ヨーロッパ中で「イギリス式庭園」が流行っている事実を持ち出して，時代の趣味がまさに「多様性」へ向かっていることを論証しようとする。さらに，シュトゥルム・ウント・ドラング派の「シェークスピア風」の作品には，アイレンホフが批判するようにいろいろなものが単に「ごちゃごちゃと」混ざり合っているだけではなく，高次元の統一があると論じ，主に，フリードリヒ2世によって酷評されたゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』を評価し，弁護している[8]。

(2)当時の翻訳事情

フリードリヒ2世は，ギリシャ・ローマの古典や，フランス，イタリア，イギリスの優れた作家の書いたものをドイツ語に翻訳する作業を通じて，ドイツ語の表現や文体が練れてくるし，また翻訳されたものを読むことで人々の知識が広がり，目も肥え，趣味が洗練されて，これがまた作家にいい意味での緊張感を与え，ドイツ文学の発展・向上にもつながって行くと考えていた。翻訳の持つこうした教育効果，あるいは啓蒙効果については，他の啓蒙主義者たちも注目していた。例えば，ビースター（Johann Erich Biester : 1749-1816）とゲーディケ（Friedrich Gedike : 1754-1803）は，彼らが編集する啓蒙主義の機関誌『ベルリン月報』第一号（1783年1月）の『序言』で，全部で八つの項目に分けてこの雑誌に掲載する論文，記事を募集しているが，その六番目には「まだほとんど利用されたことのない，重要な古典古代の傑作の翻訳」，七番目には「非凡で注目に値する外国の著作からの抜粋」といった項目が設けられている[9]。

では，翻訳をめぐる当時の状況は実際どうだったのだろうか。例えば，アイレンホフは次のように述べている。

「並の翻訳なら十分あるが，特に賞賛に値する翻訳となるとなんと数少ないことか。ラムラーによるホラティウスの翻訳が二，三，ハイルマン

によるトゥキュディデス，パツケによるタキトゥス，シーラハによるプルタルコスの翻訳，以上がすべてである。もちろん，ライプツィヒの見本市から次の見本市にかけて翻訳される，数十編のフランスやイギリスの取るに足りない小説や，ドイツに移植される数百本の外国の劇作品——それらも劇作品と呼ばれているのだ——などは論外である。」(10)

アイレンホフはさらに，エシェンブルクやレッシングといった有能な作家たちが，翻訳する必要のないものを翻訳し，翻訳すべきものを翻訳していないといって批判している(11)。もちろん，シェークスピアの翻訳はヴィーラント訳が一つあれば十分すぎるくらいで，エシェンブルクが改めて訳す必要はないとか，ディドロの作品を訳すくらいならレッシングはアリストテレスの『詩学』を訳すべきだった，などという彼の発言は，ゴットシェート派文学理論に依拠する彼の立場から出てくるもので，これを鵜呑みにするわけにはいかないだろう。しかし，上の引用の後半部と，特に劇作品の翻訳状況に関する次の指摘は，ニコライの描き出す「翻訳工場」との関連でとても興味深い。

「翻訳本のとびらに『自由に訳した』(frei übersetzt) と書いてあったら，『自由に』という言葉は『下手に』(schlecht) という意味だと理解して間違いない。翻訳者というのは，オリジナルの意味を『自由にではなく』(nicht frei)，『忠実に』(getreu) 自らの言葉に移し替えたときにだけ，賞賛を受けることができるのだ。『よい』(gut) 劇作品の翻訳には，たいてい『自由に翻案した』(frei bearbeitet) と一言添えられているが，これはたいてい下手よりもひどい作品だという意味である。」(12)

ニコライは，『ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』第一巻の中で，神学関係の本を例にとって，当時の翻訳本がどのような工程で出来上がって行くかを詳細に描写している(13)。

職にあぶれた大卒のインテリたちを職人として抱える「書籍生産工場」に，まず，高位聖職者が自分の名前で翻訳を出したいと話を持ちかける。しかし，その聖職者は序言を書くだけで，実際に翻訳を請け負うのは工場の職人たちである。ところが，職人たちの間にも階層があって，たいていは，最初に請け負った職人が自分のもらう報酬の何分の一かと引き換えに第二の職人に翻訳を任せ，これがまた同じように第三の職人に任す，といった具合にたらい回しになる。しかも，こうした工場では仕上げのスピードが重視されるため，翻訳本の質は必然的に悪くなる。それでも，一般の読者にはどこがどうおかしいのか分からないし，その分野の専門家は，序言を書いた聖職者の名前を見て批判をひかえてしまう。ドイツで出版される新刊書の二分の一が翻訳であり，少なく見積もってもその三分の二がこうした「工場」で生産されているのである。

『ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』第一巻が出版されたのは1773年であり，アイレンホフよりは10年ほど前のことだが，商業主義に乗った本の大量生産とそれに伴う質の低下といった状況は，それほど変わってはいないようである。

(3)プロイセンにおける言論の自由

フリードリヒ2世は，文学論の冒頭で，「ご存知のように，学者共和国では完全な言論の自由が支配している」(ÜDL, S. 43) と述べ，自らドイツ文学に関する忌憚のない意見を展開して行く。この「言論の自由」の問題も，当時の学識者や作家たちの間では大きなテーマであった。例えば，文学論より10年ほど前にレッシングは，ニコライに宛てて，「あなたの言うベルリンの自由とは，結局は，宗教に対して好きなだけ不作法な言動をとれる自由に過ぎません。そして，実直な人なら，こうした自由の行使をじきに恥ずかしく思うに違いありません。」[14]と否定的な内容の手紙を書き送っているが，一方でリースベック (Johann Kaspar Riesbeck : 1754-1786) は，文学論が出た3年後に「学問と芸術のよき友である現在の王は，領土内で思想の自由を認めた。これは，他ではイギリスにしかない自

由である。」[15]と述べ，フリードリヒ2世治世下のプロイセンで信教の自由が保障されていることを証言している。そして，この問題は，「啓蒙」との関連でとりわけ激しく議論されることになるのである。

カントによれば，フリードリヒ2世が言うように「学者として」自由に考え・議論すること，つまり，理性を公的に使用する際の完全な自由こそ，人々が未成年状態を脱して啓蒙のプロセスを歩んで行くために欠かせない条件なのである[16]。そして，カントもまた，フリードリヒ2世治世下のプロイセンではこうした自由が実現されていると証言する。

「自ら啓蒙され，影に怯えることなく，同時にまた公衆の安寧を保障する手段として規律正しい大勢の軍隊を抱える者（＝フリードリヒ2世）だけが，共和国では言えないような次のセリフを口にすることができるのである。『好きなだけ，何についてでも議論しなさい，ただし服従しなさい』と。」[17]

しかし，ここで気をつけなければいけないのが，「ただし服従しなさい」と但し書きがついている点である。カントが『「啓蒙とは何か？」という問いについての答え』（1784年9月）を書くに際して参考にしたであろうと言われている『思想および出版の自由に関して――君主，大臣，作家に寄せて』（1784年4月）でも，著者のクライン（Ernst Ferdinand Klein: 1743-1810）は，「言論の自由こそ，プロイセン国家の最も確かな防衛兵器である」[18]と論じる一方で，「服従こそプロイセン国家全体の核心なのである」[19]とも述べている。この「自由」と「服従」がお互い背反し合わずに共存しうることを説明するために，カントは，「理性の公的使用」とは区別して「理性の私的使用」という概念を使い，「理性の私的使用」の場面では自由は制約されうる，例えば，日常の職務に就いているときは，それについてあれこれと議論せずに自分に与えられた職務に忠実に励まなければならない，と論じる[20]。

まさにこの点が，ハーマンによるカント批判のポイントにもなってい

る[21]。ハーマンは，「家では奴隷の上っ張りを着ているのに，自由の晴れ着が何の役に立つのか」[22]と問いかけ，カントに反論する。

「こうした未成年状態にある人々の怠惰をどうしてあざ笑ったりすることができるのだろうか。このお芝居をただ口をポカンと開けて見ているだけの，なんの拘束も受けないご身分の男（＝カント）が言うところの，啓蒙された，自分で考える後見人（＝フリードリヒ２世）は，彼らのことを機械としてすら見てはいないのに。彼らのことを偉大な自分の影としか考えず，彼らは自分に仕える亡霊としてのみ存在するものと思っているから，そういった彼らのことを恐れる必要も全然ないわけである。」[23]

フリードリヒ２世は人々のことを「偉大な自分の影」であり，したがって自分の意のままになるものと見なしており，人々が未成年状態を脱することができない原因はとりもなおさずこの「自分にはものが見えていると自称する後見人の盲目さ」[24]にある。彼が抱える「規律正しい大勢の軍隊」は，「公衆の安寧を保障する手段」などではなく，「自分の不謬性と正当性を保障するため手段」[25]であり，こうした軍事力を背景に「好きなだけ，何についてでも議論しなさい」と言ってもまったく無意味である，とハーマンはカント，さらにフリードリヒ２世の唱える「自由」の矛盾を批判している。

IV　おわりに

本稿では，フリードリヒ２世のドイツ文学論を中心に置いて，これが主なきっかけとなって起こった議論のごく一部を概観してみた。今回は詳しく扱えなかったが，ドイツ語について，ドイツ語の辞書の問題，ドイツ人のメンタリティーに関する考察（他国民と比較して，あるいは，ドイツの気候・風土との関連で），政治（特に戦争）と文学の関係，文学の発展と批評の問題，宗教上の寛容についてなど，他にもいろいろと興味深いテー

マがある。さらに，『ベルリン月報』の目次を見るだけでも，フリードリヒ2世自身，あるいは彼の文学論を中心点としてその周辺に見えてくるもの以外に，当時，実に多種多様なテーマについて論じられていたことがわかる。こうした議論の総体からは，通常の文学史や文化史の概念装置では捉えきれない非常に混沌とした時代の状況が見えてくる。それは，同時代のイギリスやフランスの文学・文化，さらにはギリシャ・ローマの文学・文化との関係の中で，ドイツの文学・文化の置かれている位置を特定しようとする試行錯誤というだけではなく，さらに根本的な，「ドイツ」とは何か，「ドイツ語」とは何か，「ドイツ人」とは何なのかといったアイデンティティーをめぐる葛藤であったりもする。そんな中で，フリードリヒ2世の文学論は，この混沌とした状況——それは，ドイツ文学・文化の黄金時代を産み出した，きわめて生産的なカオスだったわけだが——の一局面を具体的に描き出すための，一つの有効な契機となり得るのである。

注

(1) テキストとしては，Friedrich der Große: Über die deutsche Literatur, die Mängel, die man ihr vorwerfen kann, die Ursachen derselben und die Mittel, sie zu verbessern. Aus dem Französischen übersetzt. Berlin 1780. In: Friedrich der Große: De la littérature allemande. 2. vermehrte Auflage nebst Chr. W. von Dohms deutscher Übersetzung. Hrsg. von Ludwig Geiger. Berlin: Behr 1902 (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts. No. 16. — Nachdr. Nendeln/Liechtenstein: Kraus Reprint 1968), S. 43-84.を用いた。このテキストから引用する際にはÜDLと略記し，ページ数のみを挙げることにする。

(2) Chr. M. Wieland: Gesammelte Schriften. Hrsg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Bd. 22. Hrsg. von Wilhelm Kurrelmeyer. Berlin: Akademie-Verlag 1954, S. 551.

(3) 例えば，フリードリヒ2世は教師たちに，単に暗記させるだけの授業で満足してはならないと戒め，「生徒たちが良いものを悪いものから区別できるように，そして，ただ『これは気に入らない』と言うだけではなく，何かを認めたり非難したりする時にはその理由も言えるように，彼らの判断力を養うような授業をしてほしい」(ÜDL, S. 65.) と要

求しているが，これなどは，今日の教育に関する議論の中でもよく耳にする見解である。また彼は，大学教授たちがめいめい自分の流儀で講義をしている現状を批判して，学問を教える際の方法論の重要性を繰り返し説いている（ÜDL, S. 54, 66.）。哲学や法学などいくつかの学問分野について，何をどの順番でどう教えるかまで事細かに口出ししているのは少々行き過ぎだとしても，教授法の重要性に言及している点は注目に値する。

（4） フリードリヒ2世は，文学論よりも20年ほど前のことだが，実際にゲラートを接見して彼の寓話『画家』（Der Maler）を暗唱させ，賞賛している。その会見の際にも，彼はドイツ文学の貧弱さを話題にして，ゲラートに意見を求めている。Vgl. C. F. Gellerts Briefwechsel. Hrsg. von John F. Reynolds. Bd. 3 (1760-1763). Berlin/New York: de Gruyter 1991, S. 78-81 [Brief an Johanna Erdmuth von Schönfeld. Leipzig, den 12. Dezember 1760] und S. 99-101 [Brief an Gottlieb Wilhelm Rabener. Leipzig, den 5. Februar 1761].

（5） 詳しくは，拙論「ニコライ風教養小説――『ゼバルドゥス・ノートアンカー』と『若きヴェルターの喜び…』を中心に――」〔獨協大学『ドイツ学研究』第35号（1996年），33-54ページ〕，36-39ページ参照。

（6） C. H. von Ayrenhoff: Schreiben an den Herrn Grafen Max von Lamberg über das Werk 》De la littérature allemande《 von Friedrich II. 1780. In: Friedrich II., König von Preußen, und die deutsche Literatur des 18. Jahrhunderts. Hrsg. von Horst Steinmetz. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 1985, S. 100-122. Hier S. 117-118.

（7） Ebd., S. 118-119.

（8） J. Möser: Über die deutsche Sprache und Literatur. Osnabrück 1781. In: Justus Möser: Über die deutsche Sprache und Literatur. Hrsg. von Carl Schüddekopf. Berlin: Behr 1902 (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts. No. 122. — Nachdr. Nendeln/Liechtenstein: Kraus Reprint 1968), S. 5-24. Hier S. 9-16.「私の年老いた父はあなたの弁護をし，偉大なフリードリヒに対するこの一件を請け負います」（Briefe an Goethe. Hamburger Ausgabe. Hrsg. von Karl Robert Mandelkow. Bd. 1. Hamburg: Wegner 1965, S. 71 [Von Jenny v. Voigts, geb. Möser. Osnabrück, Mai (?) 1781].）と伝え，メーザーの著書を送付したメーザーの娘に対して，ゲーテは，「王が私の作品を辱めたとしても，一向に不思議ではありません。何千という人々を鉄の王笏で導く権力者には，気ままで不躾な若造の作品は耐え難いに違いありません。」（Goethes Briefe. Hamburger Ausgabe.

Hrsg. von Karl Robert Mandelkow. Bd. 1. Hamburg : Wegner 1968, S. 363 [An Jenny v. Voigts, geb. Möser. Weimar, den 21. Juni 1781].) と，一見なんの動揺もないかのような返信を書いているが，同じくこの件に関するメルク宛の手紙では，「王はわがままで，偏見に捕らわれた，かたくなな考え方で，世の中の出来事を自分の思い通りにしたのです」(Ebd., S. 375 [An Johann Heinrich Merk. Weimar, den 14. November 1781].) と述べている。フリードリヒ2世の文学論に自ら反論はしなかったものの，ゲーテは，彼の『ゲッツ』評によってかなり心証を害していたようである。

(9) Fr. Gedike u. J. E. Biester : Vorrede zur Berlinischen Monatsschrift. In : Friedrich Gedike u. Johann Erich Biester (Hrsg.): Berlinische Monatsschrift (1783-1796). Auswahl. Hrsg. von Peter Weber. Leipzig : Philipp Reclam jun. 1985, S. 5-6. Hier S. 5.

(10) Ayrenhoff : a. a. O., S. 116.

(11) Ebd., S. 116-117.

(12) Ebd., S. 117.

(13) 拙論「ニコライ風教養小説――『ゼバルドゥス・ノートアンカー』と『若きヴェルターの喜び…』を中心に――」，36-39ページ参照。

(14) G. E. Lessing : Werke und Briefe in 12 Bänden. Hrsg. von Wilfried Barner zusammen mit K. Bohnen, u. a. Band 11/1 : Briefe von und an Lessing 1743-1770. Hrsg. von Helmuth Kiesel unter Mitwirkung von G. Braungart u. K. Fischer. Frankfurt am Main : Deutscher Klassiker Verlag 1987, S. 622 [An Friedrich Nicolai. Hamburg, d. 25. August 1769].

(15) J. K. Riesbeck : Briefe eines reisenden Franzosen über Deutschland. 1783. In : Friedrich II., König von Preußen, und die deutsche Literatur des 18. Jahrhunderts. Hrsg. von Horst Steinmetz. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 1985, S. 171-181. Hier 171.

(16) I. Kant : Beantwortung der Frage : Was ist Aufklärung? In : Friedrich Gedike u. Johann Erich Biester (Hrsg.) : Berlinische Monatsschrift (1783-1796), S. 89-96. Hier S. 90-91.

(17) Ebd., S. 96. (カッコ内は筆者による)

(18) E. F. Klein : Über Denk- und Druckfreiheit. An Fürsten, Minister und Schriftsteller. In : Friedrich Gedike u. Johann Erich Biester (Hrsg.) : Berlinische Monatsschrift (1783-1796), S. 51-56. Hier S. 53.

(19) Ebd., S. 54.

(20) I. Kant : a. a. O., S. 91.

(21) Vgl. Engelhard Weigl: Schauplätze der deutschen Aufklärung. Ein Städterundgang. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt 1997, S. 156-164.

(22) J. G. Hamann: Briefwechsel. Hrsg. von Arthur Henkel. Bd. 5 (1783-1785). Frankfurt am Main: Insel 1965, S. 289-292 [Brief an Christian Jakob Kraus. Königsberg, 18. Dezember 1784]. Hier S. 291.

(23) Ebd., S. 290. (カッコ内は筆者による)

(24) Ebd.

(25) Ebd.